

『図書館物語』で、これの奥付の上に「著者自伝」を書いておられるが、如何にも竹林先生らしい書きぶりこの本を手にするたびに感心している。短文ながら実によく先生ご自身を表現されていると思う。

竹林先生の影響を多分にうけた自分にとって、図書館史は恰好の研究テーマとなり、折をみては当地方の図書館史をまとめているが、一昨年（三十八年）の十月勤務先の図書館が開館四十年を迎え、これを記念し館史の編集が計画され、この仕事を担当することになった。そして昨年の正月『鶴舞図書館四十年史』（A5判 一四〇頁）として誕生したわけだが、これが国立国会図書館の『納本週報』に掲載されるや各地の図書館から寄贈依頼があり、すっかり品切れになった今日でもアメリカのC大学図書館などからも寄贈依頼状が届いている。

ささやかな館史ではあるが、自分にとっては図書館学に関するまとまった処女作となり、また館は昨年の四月、館名が名古屋市鶴舞中央図書館と改称されたが、旧名鶴舞図書館を記念するものとなったのである。（校友・名古屋市鶴舞中央図書館司書）

## 野の百合

徳永清行

経済は成長したけれども、景気は良くないそうにもない。このような当今ではあるが、わが国の保有外貨は久し振りに二〇億ドルを超えたと伝える。この数字には検討を要する。数学で考え、数字で語ることば極めて望ましいことでもあるとしても、それには前提が必要である。数字そのものが正確であるとともに、判定が確実であることが取上げられねばならない。このような心構えから、理を明らかにすることができたとしても、次にはその理を用うことは容易ではない。

同志社学園を慕って、全国から笈を負うて集る青年男女の数はニュースとして伝えられる外形を内輪にみても、逐年増大していることはたしかである。身近かに起った数例を取上げるのでは、大数の法則を示すことにはなりがたいであろうが、ここには

## 湖北行

田中順二

（女子大教授・国文学）

湖の岸おほらかに曲りゐる一部が見えてなべて枯草

セロファン紙からまりて冬の風に鳴る古き街道の軒並あはれ

たかだかと夕かがよひのうすれむとして網干せるひと村を過ぐ

どの家も家裏見せて石段のさびしき冬の対岸が見ゆ

何か混乱したところがありそうである。はるばる堅い決意で、この学園で学んでいるものが、入学当初の意気込みを失い、なかには適帰するところをあやまち、上級学年に進むにつれ、ただ押し流されるように卒業するのではないかと訴えを耳にするからである。もちろん本人の努力次第で周囲の事情にかかわらず、初一念を貫徹することとは、必ずしも不可能ではない。しかし学園の立場からすれば、希望や期待に副えるようなあり方に一段の留意を払うべきであろうこともいうを俟つまい。わが国の現状では、名ある外国の大学と比べて、施設において劣り、または私学としての本領の發揮に欠けているのは、やむを得ないとしても、それはそれなりに、進路を開きたいものである。

ある日曜、雨が降っていた静かな朝、神学館で一卒業生の結婚式が行なわれた。同志社が学園として持つ環境は、決して劣ったものではないようにしみじみと感じた。そのころ機会を得て、松下幸之助氏の講演を聞いた。同氏と懇意なアメリカの第一流電機会社の社長との対話が織り込まれてい

たので、強く記憶に残る。その一齣によれば、世界で一番良い都会、それは別荘を持つに最高という意味での都会を求めてみれば、先ず北京だろうが、現在、北京に直ぐ住めるわけのものではないから、次位のものとするならば、京都であろうというのであった。そういう見方から、京都で一番環境のよろしい地点を探すとなれば、御所の一帯ということにもなろう。同志社の位置するところは大変に恵まれているともいえる。八十五周年の記念祝典に故徳富峯翁がチャペルで諄々と話されたのは印象的であった。慶応の福沢、早稲田の大隈、同志社の新島と、三学祖を比較し、新島先生をもつ同志社を祝福された述懐は人々の心を打ったはずである。

同志社の将来は施設や機構にかかるところも固より多いけれども、かりにそのようなことを措くとしても、同志社学園はそれ自体のよりどころで精進できるはずである。先日、高田保馬先生にお目にかかった時、「小さきは小さきままに花咲きぬ、野辺の小草の安けさを見よ」との作歌を拝見した。マタイ伝(六・二八)の心でしようと

榛の木を巻きて積みたる稲藁に冬の日ざしはかげりはじめつ

いまだ咲かぬ水仙といへどゆきずりの納屋の裏べの土はひそけし

湖に向ひて光る幾筋の水おのづから涸れたるらしも

いつべより落ちくる風か絶え間なく湖のうねりの上を薙ぎゆく

すでに日の射さぬ山裾のひと村が見えをり午後三時過ぎしころほひ

湖岸より吹きくる風は止む時もなく暖房の室あたたかし